

人形姉妹

圓地文子

集英社

人形姉妹

著 者 圓地 文子

発行者 陶 山 巖

印刷者 盛 英 信

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話 東京 (265) 六一一一番

振替 東京 一五六五三番

印刷所 慶 昌 堂 印刷

一九六五年九月十日 初版印刷

一九六五年九月十五日 初版発行

定価 三六〇円

著者との了解により検印を随止します。

目

次

ニューヨークの案内者……………	七
雛の顔……………	三
雛の別れ……………	五
白い花……………	五
雛の縁……………	七
星屑の夜……………	八
母との再会……………	六
雛の前で……………	二三

姉妹絶縁……………一七

山桜の花……………一四〇

和解……………一五

恢復期……………一四

雛祭りふたたび……………一五

水辺の出来事……………一七

幻雛……………一九

装幀 関野準一郎

人形姉妹

ニューヨークの案内者

私をはじめて春市郷子^{はるいちきょうこ}に逢ったのはニューヨークで『マイ・フェア・レディ』を見た晩であるから、数えてみるともう六年前になる。その時、私はアメリカのある財団から招かれて合衆国の各地を視察旅行している途中だった。視察の目的として観劇の一項を入れて置いたので、サンフランシスコでもシカゴでもいくつかの芝居を見ることが出来たが、中でも最近のアメリカミュージカルの大ヒットとして、既に一年以上も上演されつづけ、ヨーロッパの各地をも巡業して大好評を博している『マイ・フェア・レディ』の切符を、先方で早くから用意して置いてくれたことは私には有難かった。

その時、特別、劇に精^{くわ}しい通訳をという向こうの親切心で私と一緒に来てくれたのが春市郷子であった。

その頃、郷子は二十四、五歳だったろうか。芝居^{ユキ}の衣裳^{イサフ}の研究に來ているので、大学でも演劇科を選んでゐるが、普通のアルバイトでは歸りに中南米やヨーロッパに廻って行く金が^{ない}で、アメリカでは珍しい住み込みの口を見つけて、その家で一定の時間、子供の世話をしているのだと言った。顔立ちは整った細面^{ほそおもて}で、和服に盛装したら京都風の美人が出来上がるであらうと思

われたが、黒っぽい洋服を着て、化粧もしていない素顔はいかにも勉強一筋の女子学生に見えた。

その晩は前から私に従いて各地を歩いていり、中年婦人の通訳と郷子と三人で、ホテルのグリルで食事したあと、八時から開演する『マイ・フェア・レディ』を見にブロードウェイへ行くことになっていた。

「春市さんはお国はどちら？」

と食事の時にきくと、

「東京でございます」

と答えた。外国で逢う日本人には地方出身の人が多いので、私は郷子の歯切れのいい東京弁に気をよくして、

「ずっと東京で育っていらしたんでしょ」

と確かめるようにきいた。

「ええ……私、下町なんです」

「まあ、それじゃあいよいよ大江戸ッ子じゃないの」

「先生、おうれしそうですね。サンフランシスコからずっと東京育ちに逢わないって、不服を言っているらしいじゃありませんか。どう。私は九州っぽで、お国言葉は替えられませんか」

中川夫人ががらがらした声で笑いながら言った。男のようにてきぱきしていて体も大きく、女連れで歩くのには頼もしい通訳だったが、いかにも言葉の語尾が荒いので、時々叱られているような錯覚を持つ時があった。愚痴を言った覚えはなかったが、春市郷子に逢って東京者だときいた時、

私は何となくうれしそうな表情になっていたのであろう。

「どうも相すみませんね。だけど、東京生まれのものって、地方の人のように団結しないのよ。ねえ、そうだわねえ」

「そりゃ人口一千万近いマンモス都会（その頃はまだ東京の人口は一千万を越えていなかった）じゃあ、県人会でもありませんでしやう」

中川夫人は又がらがらした声で笑って、

「先生なんか御存じないけれど、私たち戦前派は東京へ出て来た当時言葉がおかしいって莫迦にされて恨み骨髄に徹してましたわ。私、英語が得意だったんで、割りに早くコンプレックスに打ち勝ちましたけれどね……東京の人って、今でも直きに田舎っぺって言うでしやう。あれ、いけませんね」

「どうもすみません。以来氣をつけます」

・私が笑いながら、頭を下げると、郷子もくすくす笑い出した。

「私のうちの近所の人って、口が悪いんです……で、自分達だって決していい言葉じゃありませんわね。本所深川^{ほんじよ}辺りっていうのは」

「ああ、あなた、あっちですか。珍しいって言っちゃ失礼だけれど、下町も本所深川なんて黙阿弥の芝居に出て来るようなところの方の人は私の知り合いには少ないですよ」

「工場地帯ですから……それに水出^{みずで}はしますしね。いい所じゃありませんわ。私の家も、もう今は横網^{よこあみ}にはないんです」

「横網ですか……あそこには昔、××銀行のＹさんのおうちがあったでしやう。私、行ったことは

ないけれど、本所の内では落ち着きたいところらしいわね。……おうち何をしていらしたの」
こんなことをきくのも、東京者の癖である。漱石の『吾が輩は猫である』の中に『天章院さまの御祐筆ごゆうひつの妹のお嫁に行った先の誰々の何々』という系図書きを述べ立てる琴のお師匠さんが出て来るが、全くああいう戸籍調べの癖は東京者にはあるので、私も一度男の友達に、「うるさいね、あんたは」と叱られたことがあった。その後、大分たしなむようになっていたのだが、郷子に向かってもその癖が出たのである。

「……ええ、今はもう、やめてしまったんですけれども、前には人形を造っていたんです。間屋っていうほどでもありませんけれど、店では売らずに、デパートや十軒店へ出して居ました」

「まあ、そう……綺麗な御商売ね」

と中川夫人が口を入れた。

「やっぱり、あのお雛ひなさまとか五月人形とか……」

「ええ、ああいうのは際物きりものっていうんですけれど、矢張りやっていましたわ。うちではきめ込みが得意だったんですけれども……後には色んなことをやりました……私なんかも、小さい時分手伝ったことがあるんですの」

「難かしいでしゅうねえ」

と私は言った。

「ええ、本当に上手になるのには年期がかかるし、素質もありますわね」

「そのお店、今はやっていらっしゃらないの」

と中川夫人がきいた。

「ええ、もう跡形あとがたもありませんわ。没落してしまっただけです」

郷子はそれだけ打ち切るように言っただけ腕時計に眼をやった。何となく淋しそうな影が頬のあたりに浮かんでいた。恰度、ぼつぼつ芝居へ出かけてもいい時間になっていたので、私たちはそこで話を中絶して立ち上がった。

郷子はそれ以上、実家の話に触れられるのを厭うように、タクシーを拾って乗り込むと、すぐ話題を『マイ・フェア・レディ』に移して、筋書きや見どころについて話し出した。

私も予めそれを知って置く為に郷子に来て貰ったのであるから、熱心にきいている中に、郷子の身の上話については忘れてしまった。

その夜の観劇はほんとうに楽しかった。何と言ってもセリフだけの芝居をみる場合には、いくら横で説明してくれても言葉が自分に呑みこめないもので、しつくりしない点が多く、興味が半減するのだが、歌と踊が主になっている上に、オペラのものものしい古典調の全くない、軽快、潤達なテンポと明るさは、異国人の眼にもこの上ない娯しめる見ものであった。

ヨーロッパのオペラコミックがアメリカという若い国へ移植されて来てこれほど土壤にあった風化を遂げ、色も味も見事に実を結んだことは充分称賛していいと私は思った。

言葉のわからない私も、あの舞台には完全に溶けこんでたのしく時を過ごすことが出来た。ミュージカルというものの面白さは完全に心身の凝りをほぐして爽やかな愉快さに溢れて観客が劇場を出て行けることだ。そうして、そのあと一晩ぐっすり眠れば明日の朝は前の晩の芝居のことなどけ

ろりと忘れて、爽快な健康だけが見たものの心身に残っているというような質の娯しさなのだ。

芸術というものの人間に与える影響にも色々あるが、アメリカミュージカルのそれは極めて娯楽性の強い……その癖、この上なく爽やかな明るい後味が特徴であらう。

兎も角、私は疲れるどころか、大変たのしい感じで、……上機嫌で劇場を出た。

郷子の通訳はこの観劇には大して必要でなかったわけだが、細かい点でやっぱり彼女が傍にいてくれた方がよかったとは思った。お茶を飲んで帰ろうという話になって、三人は劇場のあるブロードウェイから、余り離れていないレストランへ入って行った。

華やかな楽音や歌声、美しい女優の群れている舞台がまだ自分と一緒にいるような雰囲気包まれて、私たちは普段よりも生々していた。

「この切符はプレミアム付きでもなかなか手に入りませんの。A財団と先生のお陰で私もいい思いしましたわ」

と郷子はうれしそうに言った。

『マイ・フェア・レディ』は最近、日本でも江利チエミの主演で上演されたから、読者の多くは御承知のことと思うが、バーナード・ショアの『ピグマリオン』を根にして脚色したもので、若い言語学者がふとした縁で悪意になった訛のひどい無教養な女性に正しい言葉を教え込み、匡正してゆく教育課程の中で、彼女と恋愛するようになり、ついには、完全に優雅な『マイ・フェア・レディ』に仕立て上げた彼女と結婚するという、知的シンデレラの物語である。言葉の匡正は兎も角として、その短時日に、完全な教養を身につけた見事な女性が出来上がるというのは絵空事のお話だけ

れども、兎も角、この物語の核心が言語というものに焦点のある点に、シヨオ特有の皮肉な文明批評があるのであろうか。その晩の三人の女のお茶を飲みながらの劇談にも、そのことが中心になったのは当然であつた。

私は昔劇作の勉強をしていた頃に、シヨオの戯曲を可成り読んだが、『ピグマリオン』には取りつかずにしまった。英学塾出の中川夫人も読んでいなかったが、郷子は感心に原作をよんで来ていて、このミュージカルとどういうところが違っているかなどについても精しく説明してくれた。

言葉や旅についての話題がいつか私たちを再び日本語の標準語と、方言の方へ引っぱって行つた。「東京弁は歯切れがいいなんていうけれども、本当は僅か三、四百年の間に出来た文明社会の言葉ですものね……ちょっと東京を離れると、関東の訛は音が強くて、泥ばねでもかけるように醜く響く言葉ね。神奈川、千葉、埼玉、茨城……皆、言葉はよくないわよ」

と私が言うと、郷子はそれを受けて、

「ほんとうにそうですわ。私のうちは昔、埼玉県でお祖父さんの代に東京へ出て来たんです。それで、親類があつちに多いんですけれど、ほんとうに言葉は悪うございますね」

と言つた。

「埼玉はどちら？」

と、私は例の詮索癖を出して訊ねた。

「岩槻です」

と郷子は答えた。

「ああ、そう……じゃあ、人形の本場じゃありませんか……なるほど、それで東京でもその御商売になられたってわけね」

「どうもそうらしいんです。私のうちのことについては、先生なんかにきいて頂くと面白いことがいろいろあるんですけれど……」

郷子はそう言って、ちょっと眼を伏せたが、唇を結んだまま、口辺に苦笑じみた微笑を湛えて、「でも、客観的に面白いなんていうことは、内輪のものとしては辛い、悲しい話が多いんですものね。……私なんかもこうして家を離れて外国へ来ていますから、他人ごとみたいに笑って話していただけますけれど、東京にいた時分には、面白いどころではありませんでしたわ」

と言った。

何か話したそうで、話せない事柄が自分の家の歴史を中心にして、郷子をもどかしくしているように見えた。

「あなた、御両親は？」

と中川夫人がきいた。

一種の誘導訊問の形である。

「父は早くに亡くなりましたの……母は生きていますんですけれども、家を出てしまったのですから、……私たちは祖父と祖母に育てられたようなものですわ。勿論、もう二人とも亡くなりましたけれど」

郷子はそこで又、にっこりして、